６　みんなの広場

　皆様から投稿していただいたきました。

武田金三郎さんの投稿

エッセイ風自分史・三郎
　　　　　　　　　その一二　　進学を決意した日

　私の生家は水田がのであったこと、おまけに父が文盲、兄弟が九人という、文字通りの貧乏人の子沢山を地で行っていることは前に書いている。
　中学校を卒業したら東京に出て一番給料の高い会社に就職し、ありったけを母に仕送りするのだ。これを小学五年生ころから堅く決意し、その日が来ることを手ぐすねを引いて待ち焦がれていた。これは中学生になっても変わらないばかりか、いよいよ強くなるばかりであった。
　だがこれだけだと嘘になる。そうした決意は確実に持続していたものの、二年生、三年生になるに連れて進学したいという、切望としか言いようのないものを心の奥に押しとどめておかなければならないを抱えていたのである。中学二年の担任は中村要蔵先生で、彼は社会科歴史を教えていた。　中学の三年間で私は彼から大きく影響を受けた。先生は私を「キンザ」と呼んで授業外でも取り立ててくれた。好きな教科である数学，理科，社会科歴史、プラス国語では上位の連中と肩を並べることができたのは好きな教科というだけでなく、進学組の連中にこれだけは負けたくない、という感情も大きく作用していたのはない。
　しかしこれは中学三年生の頭までのこと、三年生になるともはや授業の大半は進学組のためにシフトされてしまっていった。夏休みからは彼等のための補習授業まで行われた。このころから私は授業に身が入らなくなっていた。三年生になって担任が嫌いな先生に変わったのも大きい。　「キンザ、お前どうしたんだ。俺はもう知らんぞ」
　中学三年の一学期末テストが終わって夏休み直前、中村先生と廊下ですれ違ったときこう言われて以来、私の心は路頭をさまよっているみたいになったものだ。中村先生からも見放されてしまった。この思いであった。
　冬休み明けの三学期になると高校進学願書受付が始まる。そうしてとうとう迎えた願書受け付最終日の朝、私は高校進学を母に泣きついた。中卒で就職するより高校を卒業した方が給料が高いから、などとありったけのごたくを並べて。
　「何とかなるべがら、三郎のええようにすればええ」
　母も薄々私が必死に隠していた本心を察していたと思う。その日、学校に行くと担任でなく中村先生を職員室の隣にある図書室まで来てもらい、私の意思を伝えた。
　「フン、今になってこんなこと言ってどうするんだ。俺は君が会社勤めには向かないと思っていた。あれほどナゾをかけていたのに。今からだと志望校は絞られる。君は公務員になるのが一番だ。チマチマした町役場より国家公務員になれ。五城目高校の林業科に入学して営林署職員を目指したらどうだ。の仕事は面白いぞ」
　図書室の大きな机を挟んで向かい合って座り、私は額を机にくっつくほど、涙をボロボロと流しながら一も二もなくこれを受け入れた。これまでの半生であれほど大きなに立たされたことはない。

俳句の投稿

春の日や古着集めて大掃除　　萩野けいさん

（はるのひやふるぎあつめておおそうじ）

蕗の薹摘めば手に染む香かな　　宇佐美咲子さん

（ふきのとうつめばてにしむかおりかな）

箸はこぶ兄の笑顔や蛍烏賊　　柿崎妙子さん

（はしはこぶあにのえがおやほたるいか）

寺町の一と日華やぐ花祭　　熊谷幸二郎さん

（てらまちのひとひはなやぐはなまつり）